

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 ブリ

学名 *Seriola quinqueradiata*

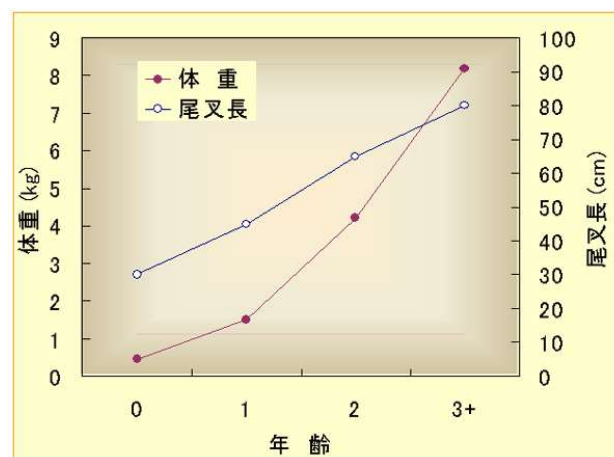
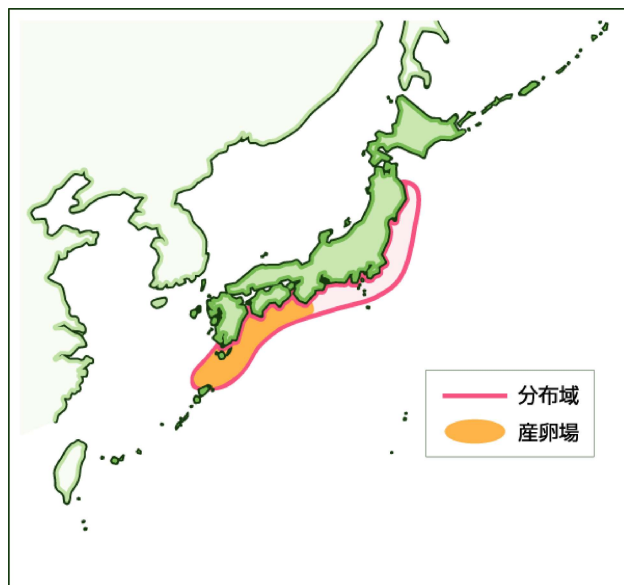
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 7歳程度
- 成熟開始年齢： 2歳（50%）、3歳（100%）
- 産卵期・産卵場： 冬～春季（2～5月）、主に薩南・日向灘～四国沖
- 索餌期・索餌場： 夏～秋季、太平洋地先全般
- 食性： 稚魚は動物プランクトン、13cm以上では完全な魚食性となり、いわし類やあじ、さば類、底魚類など
- 捕食者： 流れ藻に付随する時期には共食いすることがある

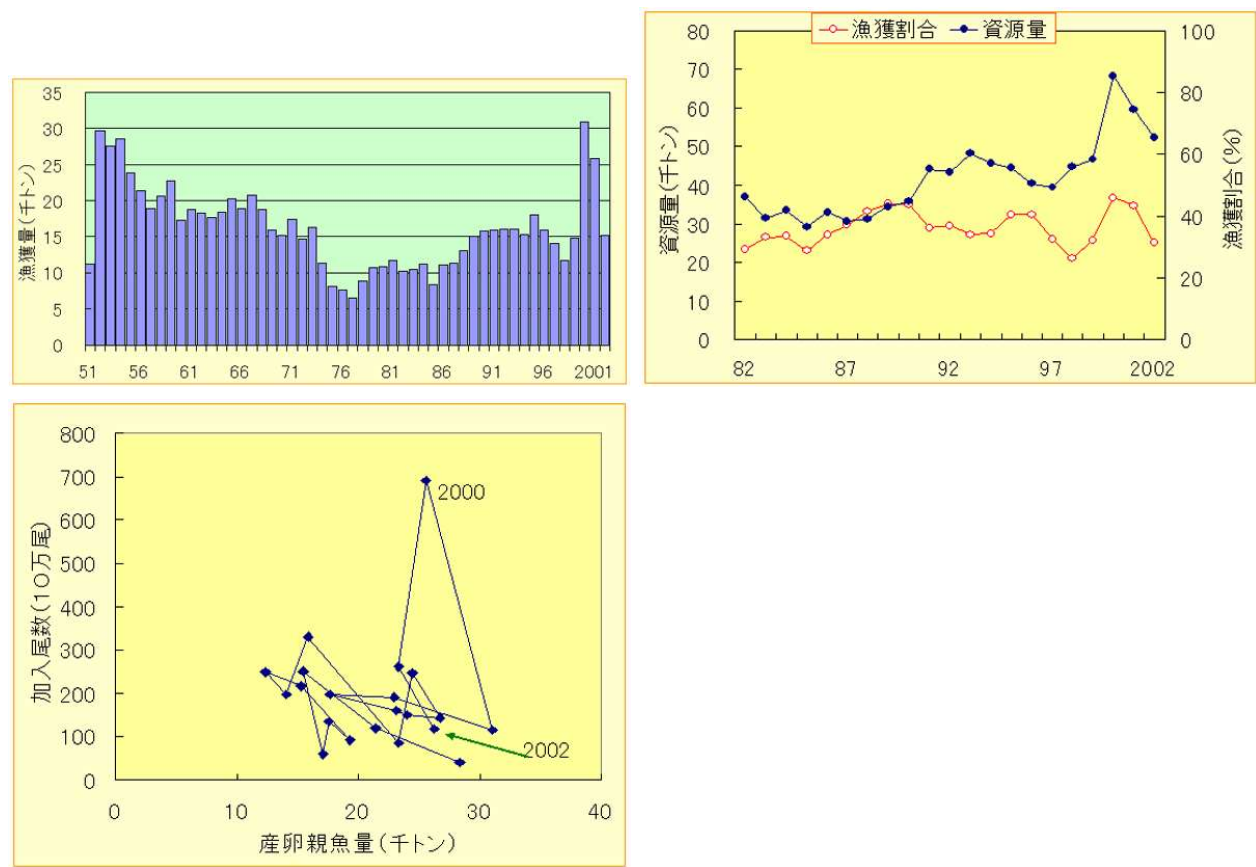


漁業の特徴

ブリは大型定置網の主要な対象種で、太平洋側では2002年には漁獲量の48%をまき網が、36%を定置網が、11%を釣りが占めた。4～6月には鹿児島県から静岡県にかけてモジャコ採捕が行われている。引き続き小型魚は沿岸の定置網に入網する。若齢魚は太平洋沿岸に広く分布し、一部は太平洋北区まで回遊する。1950年代前半以前はブリ銘柄の大型魚の漁獲が多かったが、近年では若齢魚中心の漁獲となっている。

漁獲の動向

鹿児島県から岩手県地先におけるぶり類の漁獲量は、1951年に約30,000トン記録して以降減少し続け、1977年には6,500トンの最低値となった。その後1987年までは10,000トン前後、1988～1999年では15,000トン前後とやや増加した。2000年には31,000トンに急増したが、2001年には27,000トン、2002年には16,000トンと減少している。外国漁船による漁獲はない。ぶり類の漁獲量にはブリの他にヒラマサ、カンパチを含んでいるが、その大部分はブリであると考えられる。



資源評価法

年齢別資源尾数をPope（1972）の近似式を用いて試算した。3歳以上の最高齢グループと2歳の資源尾数については、平松(2001)の方法により、プラスグループを考慮して計算した。漁獲係数については、最高年齢3歳以上と2歳の値が等しいと仮定した。最近年である2002年の漁獲係数は、1997年から2001年までの5年間の平均値とした。

資源状態

資源量は、1982～1990年には30,000～40,000トンで推移していたが、1991～1999年には40,000～50,000トンとなり、2000年の卓越年級群の出現により2000年に68,000トン、2001年に60,000トンとなった。2002年には52,000トンと推定された。神奈川県・三重県・高知県の3県の定置網におけるブリ銘柄の漁獲個体数は、1900年から1950年代前半まででは年間50万～100万個体を維持していたのに対し（木幡, 1986）、1982～1993年では5万～10万個体、1994年以降でも10万～20万個体に過ぎない。このように、太平洋系群全体の漁獲量はかなり回復したものの、その年齢組成は若齢魚に大きく偏っていると考えられる。



管理方策

現状の漁獲圧はかなり高く、依然として親魚量が少なく、また成長乱獲の状態にあることから、Fを引き下げることによる資源の増大を目標とする。再生産関係が特定できないためYPR管理を行うが、一定割合の親魚（=大型魚）量を確保するという観点から、FlimitとしてF30%を用いる。なお、 $F30\% = 0.31 = F_{max}$ 、 $F_{current} = 0.58$ である。Ftargetとしては安全率を見込んで $Flimit \times 0.8$ を用いる。卓越であった2000年を除く近年と同様の加入が続くと仮定すると、漁獲量は一時的に減少するものの、2006年以降には1982年以来最大であった31,000トンを超える親魚量となる。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	10千トン	F30%	0.31	21%
A B C target	8千トン	0.8F30%	0.24	17%

漁獲割合 = ABC / 資源重量

F値は各年齢の単純平均

資源評価のまとめ

- 2002年の資源量は52,000トンと推定された
- 現在の資源水準は資源の最低水準期であった1980年代より多い
- 年齢組成は資源の高水準期であった1950年代以前に比べて若齢魚に大きく偏っている

資源管理方策のまとめ

- 親魚を中心に資源量の増加を目指す
- 若齢魚中心の漁獲を改善するため、漁獲圧を削減することが必要

資源評価は毎年更新されます。